

2026-02-10 すばる科学諮問委員会 議事録

日 時 : 2026年2月10日9時30分~12時10分(JST)
場 所 : 各自 zoom 接続
出 席 者 : 諸隈智貴、久保真理子、伊王野大介、井上昭雄、大栗真宗、小宮山裕、
但木謙一、冨永望、松岡良樹、和田武彦、武藤恭之
欠 席 者 : 大朝由美子、河北秀世、川端弘治、佐藤文衛、下西隆
陪 席 者 : 宮崎聡、神戸栄治、早野裕、小山佑世、表泰秀

【議題】

1. Report from Subaru Telescope (宮崎)	4
2. Comment from UH (Sanders)	6
3. S26B におけるダウンタイム: AZ/EL エンコーダ更新 (早野、表)	7
4. 前回議事録の承認および議事録フォーマットの確認 (諸隈)	10
5. Roman-すばる協調観測の進捗および Call for Proposals 方針 (松岡)	11
6. DPR 導入検討結果およびプロポーザル規則の運用に関する議論 (武藤)	13
7. Rubin/LSST Data Right Holder (PI/JA) 追加募集の選考結果 (大栗)	15
8. Subaru Users Meeting 2026 (UM 2026) 開催日程および準備状況 (諸隈)	17
9. その他報告 (諸隈)	18

=== 今回の A/I 及び議論サマリ ===

■ 報告事項

- ・ 直近の運用統計では、望遠鏡・装置起因トラブルは少なく、2025年は高い観測成功率を達成した。一方で天候損失が大きく、特に1月のPFSランが影響を受けた。2月上旬にはハワイ州全体の悪天候により山頂観測停止および観測所閉鎖が生じた。
- ・ S26B Call for Proposals を2月3日に公開した。
- ・ 長期メンテナンス計画を更新し、AZ/EL 駆動系エンコーダ更新に伴い2026年11月中旬から約16週間の停止を見込むこと、2026~2027年に複数の保守項目が予定されている。

- PFS では S25B 最終ランは大きなトラブルなく完了したが天候損失が大きかった。SM2 NIR カメラ検出器交換、AG カメラ改修、パイプライン再解析の進捗が報告された。
- Ho'ākoako Community Engagement Workshop の状況を共有し、マウナケアの将来ガバナンスやリース問題を巡る議論が継続している。

■ 議論

- S26B の約 16 週間ダウンタイムについて、エンコーダ老朽化対策として更新が必要であることを確認した。工期短縮の可能性について観測所は業者と協議を継続し、早期に見通しを確定する。
- S26B の PFS-SSP への観測夜配分は、全体 29 夜から試験観測 4 夜を除いた 25 夜を分母とし、SSP 上限をその半分の 12.5 夜とする方針で合意した。
- 議事録フォーマットは、[Summary]・[Action Items]・[Details] の 3 本立てとし、[Decisions] は廃止する。公開版は [Summary] と [Details] のみとし、「A/I 及び議論サマリ」はニュースレター用と議事録用の 2 種を作成する。
- Roman-すばる協調観測では、Prioritized Themes の公表準備状況を確認した。3 月中頃公開予定の Call for Proposals の文案は SAC にてメール審議により確認する。
- DPR は現時点では導入しない方針とした。若手層の支持を踏まえ将来継続検討する。また、インテンシブ PI の時間交換提案に関する専念義務解釈の課題を共有し、状況を注視する。
- Rubin/LSST Data Right Holder (PI/JA) 追加募集では、PI 3 名、JA 3 名を採択した。次期公募を 2027 年前半に実施予定である。サーベイ開始（2026 年 4 月見込み）に伴うフォローアップ需要増加と共同利用時間確保への影響に留意する。
- Subaru Users Meeting 2026 は 6 月 17~19 日を第 1 候補として調整する。
- SCEXAO の Facility Instrument 化の是非については、コミュニティアンケート設計を進めるとともに、ABC と共同で将来的体制を検討する。

1. Report from Subaru Telescope（宮崎）

- Operation
- Telescope
- Development

2. Comment from UH (Sanders)

3. S26B におけるダウンタイム：AZ/EL エンコーダ更新（早野、表）

3.1. Summary

- ・ S26B の Call for Proposals に記載した AZ/EL インクリメントエンコーダ更新に伴うダウンタイム（11 月中旬開始、約 16 週間、S26B 期間内は約 2.5 ヶ月）について、その背景、必要性および想定工期の説明が行われた。ダウンタイムは原則として連続停止を想定している。
- ・ 本エンコーダは建設当初から使用しており、結露や汚れの影響により判読不能となって AZ/EL 駆動が停止する事象が発生してきたこと、EL 側チャンネル 7 を信号劣化のため無効化して運用していること、不使用チャンネルの増加が追尾精度の低下につながり得ることが報告された。これらを踏まえ、老朽化対策として更新を進めてきた経緯が共有された。
- ・ 工期約 16 週間は現時点での概算であり、短縮の可能性については業者と協議中である。短縮にはコスト増および人員確保の制約が課題であることが説明された。
- ・ 工期短縮や開始時期の変更がプロポーザル提出に影響を及ぼし得る点を共有し、可能な限り早期に見通しを確定し、観測所が次回 SAC において報告する方針を確認した。
- ・ S26B における PFS 観測時間配分について議論を行い、観測可能夜数 29 夜から試験観測 4 夜を除いた 25 夜を分母とし、SSP の上限をその半分である 12.5 夜とする方針を SAC として確認した。

3.2. Details

諸隈：次にダウンタイムについて議論する。本件は早野さんおよび表さんに説明いただく。神戸さんは 3 月までの参加予定であり、後任として表さんが年度明けから参加予定である。引き継ぎの観点から今回より参加いただいている。

神戸：滞在期限（いわゆるビザ）の問題で日本へ帰国することとなった。8 年間お世話になった。3 月末は休暇取得予定のため次回 SAC には参加できない見込みであるが、引き続きハワイ観測所所属として可能な支援は行う。今後ともよろしく願います。

諸隈：長年のご尽力に感謝する。それではダウンタイムについて、早野さん、表さんより

説明をお願いします。

早野：今回必要となるダウンタイムは、AZ/EL のインクリメント・エンコーダー更新のためである。現在貼り付けられているエンコーダーを取り外し、新規エンコーダーへ交換する。また読み取りヘッドも交換する計画である。

背景として、インクリメント・エンコーダーは望遠鏡建設当初から使用してきた。結露や汚れが発生しており、清掃を行いながら運用してきた。特に湿度が高い夜には、判別不能となり、AZ/EL 駆動システムが停止する事例がある。その場合は望遠鏡が停止し、山頂制御棟のローカルコントローラーから復旧している。

また、AZ/EL のインクリメント・エンコーダーのチャンネル7は現在 disable している。読み取り信号が低下し、一定信号が得られないとエラーを起こし駆動が停止するためである。現状は1チャンネルを無効化して運用している。他チャンネルでは同様の事象は発生していないが、将来的な頻発を防ぐため早期更新が望ましい。AZ/EL とも8チャンネル構成であり、不使用数が増加すると精度が劣化することは試験的に確認されている。

2022年度から現地調査、設計、製造、評価試験、設置計画を進めてきた。2025年度に製造および調達を実施している。

実施時期は11月中旬から約16週間を仮設定している。契約準備を進めると最速で夏契約は可能であるが、7月を目途に望遠鏡部門スタッフが日本へ帰国するため、体制再構築が必要である。夏実施は人的に困難と判断した。設置期間16週間は概算であり、短縮可能性について業者と検討中である。

諸隈：結露によってエンコーダーが判読不能となる状況がよく理解できていない。エンコーダーが結露するような状況でもドームは開いているのか。

早野：観測条件がぎりぎりの場合にはドームを開けて観測することがある。結露が発生するのは、湿度が80%近い状況である。

諸隈：湿度が80%程度でも結露が発生するのか。

早野：発生する場合がある。放射冷却により冷却されることがある。

井上：Call for Proposal にはダウンタイムが2.5か月と記載されているが、16週間は約4か月に相当する。これは16週間の間にも観測可能な日が含まれるという意味か。

早野：その意味ではない。2.5か月はS26B期間内のダウンタイムを指しており、その後S27Aにもまたがるという意味である。

井上：16週間は連続したダウンタイムという理解でよいか。

早野：その通りである。

宮崎：先月の報告では1か月と聞いた記憶がある。なぜ16週間となったのか。

早野：各工程を整理し、バーチャートを作成して精査した結果、約 16 週間が必要との見積もりになった。

宮崎：短縮に関する検討はいつ頃までに結論が出るのか。

早野：1~2 か月以内、遅くとも年度内には見通しを示したい。

宮崎：できる限りの短縮を強く要望したい。

早野：承知した。コストと工期の兼ね合いを踏まえ、最適な案を検討する。

宮崎：短縮した場合、コストは増加するのか。

早野：人員を増やすことが最も単純な短縮策であり、その場合はコスト増となる。

井上：人数を増やせば期間は短縮できるが、総人月は変わらないのではないか。

早野：航空券などの追加費用が発生する。また、作業人員の確保が非常に難しく、単価が上昇する可能性もある。

井上：承知した。

早野：業者側からは、他案件との兼ね合いもあり、追加の人員確保が困難であるとの説明を受けている。これ以上の作業員を確保することは容易ではない状況である。その点について理解いただきたい。

諸隈：井上さんおよび Dave さんの懸念は、工期の前倒しは解決になるのかどうかという点である。

井上：PFS の SSP について考えると、UDS の COSMOS や SXDS フィールドは主に秋から春にかけて観測している。11 月は両方を半夜ずつ観測することも可能ではあるが、効率は悪くなると思われる。

早野：11 月中旬を開始とした理由は、11 月上旬から暗夜が始まるためである。11 月初旬からダウンタイムにすると暗夜を失う。暗夜を確保するため中旬開始とした。

諸隈：例えば 10 月中旬の明夜から開始する案はどうか。何を取って、何を捨てるか、という選択になるかもしれない。

井上：状況は理解した。やむを得ないかもしれない。

宮崎：短縮検討はあと数か月かかるのか。

早野：数か月、遅くとも年度内には結論を出したい。

宮崎：はっきりした段階で SAC に再報告すべきである。今回は 3 月である。3 月には見通しがある状態が望ましい。

早野：SAC までには確定させるよう努める。

和田：単純な質問だが、16 週間の間は全期間ダウンタイムか、それとも間欠的か。

早野：ビザなし渡航は 3 か月までであるため、途中で一旦帰国する。その間に観測可能と

する案も検討したが、その準備に追加で約 1 週間を要する。観測可能期間の増加は限定的であるため、連続したダウンタイムとする方向である。

諸隈：確か Call for Proposal にも Mid November からと具体的に書いてあったはずである。

表：その通りである。HSC は 8 月と 10 月、PFS は 9 月と 11 月の 2 Run と明記している。暗夜は 11 月 2 日から 15 日までであり、ダウンタイムは 11 月 16 日開始想定である。

諸隈：検討の結果、例えば短縮や期間変更が生じた場合、プロポーザル募集との整合はどのようにするのか。例えば 1 月後半が空いた場合、提案が出ていないという事態が生じ得る。

表：想定としては、多少後ろが短縮される、あるいは 11 月開始が 12 月にずれる程度である。S26B の 9～11 月が完全に消失するような前倒しは想定していない。

武藤：工期変更が生じた場合、タイムクリティカル観測に影響がある。公募締切は 3 月 3 日であるが、検討結果次第で締切後数日は受け付けるなど柔軟対応は可能か。

早野：1 か月短縮は困難である。短縮できても 1～2 週間程度である。始まりの 1 週間と、終わりの 1 週間が短縮するようなイメージである。2 月中に検討を加速し、可能な限り締切前に見通しを出す。

武藤：了解した。

小山：過去にもセメスター中に時間が空いた場合、Supplementary Call を行った例がある。そのような対応も可能性としてはあり得る。

武藤：了解した。

諸隈：次回 SAC で確定状況を報告してもらおう。

表：ダウンタイムに関連して、PFS の SSP 夜数配分についても本日中に方針を決定する必要がある。PFS は 9 月および 11 月の 2 Run で、合計約 29 夜を想定している。SSP からは、そのうち少なくとも半数程度を確保したいとの要請が出されている。

諸隈：通常のセメスターは 6 か月で 30～35 夜である。今回は約 3.5 か月であることから、期間に応じて夜数を按分して考えるべきではないか。

松岡：3.5 か月に換算すると、計算上は 17.5 夜程度となる。

表：29 夜の半分は約 15 夜である。

武藤：15 夜を SSP に配分した場合、Open-use は何夜残るのか。

表：試験観測 4 夜および UH 約 4.4 夜を差し引くと、Open-use は約 5.5 夜となる。

武藤：5.5 夜では少ないのではないか。

井上：SSP は少なくとも半分以上を要求しているという理解でよいか。

表：その通りである。最低でも半分以上を希望している。

武藤：SSP の要求である 15 夜については理解できるが、その結果として共同利用が約 5.5

夜となるのは少ないのではないか。

井上：SSP の上限に関するルールや、分母の定義についても確認すべきである。

諸隈：全体を期間に応じて按分するのであれば、一貫性は保たれる。

武藤：5.5 夜という数字は影響が大きい。

諸隈：セメスターが通常の半分である点も考慮する必要がある。

小山：本件は PFS に限った夜数の議論である。HSC については今回も Run は設定されているが、SSP は設定されていないので、夜数としてはそれなりに暗夜もあるということにはなっているはずだ。

表：HSC の Open-use は約 29 夜確保されている。逼迫しているのは PFS である。

小山：やむを得ない側面もあるが、SAC としての判断が必要である。

武藤：個人的には、最低 5 夜は確保すべきであると考えている。1 件の提案が最大夜数である 5 夜を申請し、それが高く評価された場合に、フル採択として 5 夜を配分できることが、最低限守るべきラインであると考えている。その観点からすれば、現状の夜数でもぎりぎり許容範囲だと考える。

小山：時間交換はどのように想定しているのか。

表：時間交換は現時点では含めていない。仮に発生した場合は、さらに厳しい状況となる。

小山：時間交換からの PFS 夜数がゼロとは考えにくい。

武藤：Gemini や Keck に対し、今回は時間交換を控えてもらうよう交渉することは可能か。それは難しいことなのか。

井上：UH の 15% は、暗夜・明夜を含めた全体に対する割合であるはずである。

表：現行の運用では、各装置の観測期間に対する 15% を上限としている。ただし、近年は要求が高まっており、より多くの夜数を求められる可能性がある。UH とは別途交渉が必要である。

井上：現状が厳しいことを説明し、要求を抑制してもらう方向で調整するのが適切ではないか。

表：現在想定している約 4.4 夜よりもさらに減らすよう要請した場合、UH が受け入れるかどうかは、実際に交渉してみなければ分からない状況である。

富永：SSP が半分以上を要求する根拠は何か。

表：S25A 期に PFS の共同利用が開始された際、SSP チームから全体の観測夜数の半分以上を確保したいとの要請があり、PFS 全体の観測時間を含めて夜数を縮小した経緯がある。観測所側としては、それは S25A 期に限った要請であると理解していた。しかし、SSP チームはそのようには認識しておらず、S25A 期以降も同様に、PFS の全観測夜数の半分以上を

SSP に配分すべきであるとの立場を示している。S26A 期においては、Near IR 検出器交換の影響により観測夜数が大幅に減少し、約 14 夜程度であったが、比較的多い夜数を確保していた。SSP チームは、S26B 期においても同様に半分以上を維持したいとの意向を示している。

富永：15 夜はちょうど半分に相当するのかわ。

表：29 夜を想定した場合、半分は約 15 夜である。

富永：Open-use が約 5 夜となるのは、他の枠を差し引いた結果か。

表：UH 約 4.4 夜および試験観測 4 夜を差し引いた結果である。PFS 開発チームからは、毎回「2 つの Run でそれぞれ 2 夜を確保してほしい」との要請があるため、その前提で算出した数字である。

富永：試験観測は装置運用上必要なものであることを考えると、全て共同利用に被せるのは違うように思う。

表：「共同利用に被せる」とはどのような意味か。

武藤：まず全体の 2 週間から試験観測分を差し引き、その残りに対して SSP の 2 分の 1 配分するという考えではないか。

富永：その通りある。

表：25 夜を想定して、ということですね。

諸隈：SSP の要求は「半分以上」なのか、それとも 15 夜固定なのか。

表：半分以上である。そうすると PFS-SSP は 12.5 夜になる。

諸隈：そうすると共同利用に確保される夜数は 5.5 夜から 8 夜になる。

表：共同利用が 8.75 夜となる。UH は 3.8 夜なので、約 4 夜とすると、PFS-SSP は 12.5 夜になる。

諸隈：SAC として SSP に何夜あげてよいかを決めないといけませんね。

表：SSP チームからの「半分以上」という要求を認めるかどうか、SAC による判断が必要である。

諸隈：ここまでの議論では、半分以上を超えるのは好ましくないという意見だったと思う。一方で SSP は観測が遅れている。その分母を何にするかというところでは、PFS の観測 Run 全体ではなくて、試験観測分は引いたものを分母とする、というのが今のところ SAC の全体の意見なんじゃないですかね。

但木：前回も SSP 側の要求を受け入れ、観測夜数を減らした経緯がある。毎回 SSP の要求をそのまま受け入れるのではなく、SAC として全体最適の観点から判断すべきではないか。SSP 側からの要請があることは理解するが、それに全面的に従う必要はないと考え

る。共同利用時間を確保するという方針の下で、「今回は PFS-SSP 観測にはこの夜数を配分する」と明確に示すことも可能ではないか。

諸隈：その考え方には同意するが、最終的には具体的な観測夜数を示す必要がある。

また、SSP 側が半分以上を要請する根拠については十分に理解できていないため、明確な説明を求めたい。

武藤：共同利用で最低何夜確保するかという観点があれば判断しやすいのではないか。過去の PFS 提案では 3~4 夜の要求が多い。共同利用の立場からは、少なくとも 3 件程度をフル採択できる夜数、すなわち 8~10 夜程度は確保したい。

大栗：退席していたため完全にフォローできていないが、PFS の Run が 2 つということか？ HSC はいくつか？

表：HSC も 2 つである。また、11 月中旬からダウンタイムに入る。

大栗：現在、共同利用としてどの程度の夜数を確保するかが論点であるが、戦略枠以外の暗夜を 15 夜以上確保するというガイドラインがあった。HSC および PFS がそれぞれ 2 Run であると仮定すれば、単純に按分すると PFS で最低 7.5 夜は確保する必要があると考えられる。これを一つの最低ラインと位置づけ、その水準を満たすために、戦略枠の夜数を抑制するよう求めるという考え方も可能ではないか。

諸隈：エンジニアリング観測を分母に含めるか否かで結果は変わる。

大栗：含めない場合は 8 夜台となり、含める場合は 5 夜台となる。

武藤：先ほどの「暗夜を 15 夜以上確保する」というガイドラインは、3 回の Run を想定して設定された数字なのか。

大栗：その点については明記されておらず、解釈の余地があると思う。

諸隈：この点は毎回議論のたびに整理が必要となっている。明確に定められたルールと目安が混在しているように思われるため、それらを一覧できる形で整理できないだろうか。これは将来的な課題としての提案である。毎回同様の計算を行い、どのルールを適用するかを議論する状況は効率的とは言えない。

その点は今後の改善事項としつつ、本日は PFS の夜数配分を決定する必要がある。

小山：暗夜 15 夜を確保するという点については、現行のルールとして定められていると認識している。ルール自体を変更するのであれば別途議論が必要であるが、現時点ではその方針で運用することになっている。

ただし、この「15 夜」は暗夜全体に対するものであるため、HSC が暗夜を占めていれば形式上は満たされることになる。しかし現在は PFS と HSC が併存する初めての状況となっており、その中でどのように配分するか、については改めて考える必要がある。

したがって、即座に結論を出すのは難しいという意見には同意する。一方で、セメスターが短縮された場合であっても15夜は確保するというのが、これまでの議論の経緯であったと理解している。主鏡蒸着が実施されるセメスターであっても、15夜は確保する方針で議論してきたはずである。

そのため、主鏡蒸着があるセメスターでは特に厳しくなり、15夜をぎりぎり確保できるかどうかというシミュレーションをこれまで提示してきた経緯がある。

今回は15夜自体は満たす見込みであるが、HSCとPFSを分けずに算出しているため、同様のシミュレーションを行うと今回のような配分になるという理解である。

表：仮に暗夜15夜をPFSとHSCで均等に考えるとし、さらに試験観測4夜を除外して計算すると、共同利用として約8.5夜を確保できることになる。その場合、一定のバランスは取れていると言える。

諸隈：現時点での落としどころとしては、その案が妥当であるように思われる。

武藤：TACの過去の傾向を見ても、8.5夜という数字はぎりぎり許容可能な水準である。

諸隈：当初の29夜というのは、半月から半月という意味か。

表：その通りである。9月3日から17日までで15夜、11月2日から15日までで14夜を想定している。11月16日が月曜日であり、その日からダウンタイムに入る想定である。

諸隈：この29夜が増える可能性はないのか。

表：SAの立場から見ると、これ以上増やすのは困難である。ユーザーサポートの観点では、観測Runが設定されていない期間であっても、PFS観測Runの準備作業が相当な負担となる。過去には明夜を含めて19夜から20夜近いRunを設定したこともあったが、その運用は非常に厳しく、現在は避けるべきであるとの認識である。

諸隈：では、29夜を増やすことはないという理解でよいか。

表：その通りである。

諸隈：承知した。そうすると、先ほどの計算に基づけばSSPは12.5夜となるが、現状でそれ以上減らす方向性はあるのか。これまでの議論からすれば、減らすとすれば12.5夜未満ということになる。PFSの観測Runが3回に増える可能性はないのか。現在は2回であるか。

表：観測Runは2回である。連続Runや3回Runとする可能性についても検討した。例えば8月、9月を分け、10月・11月にHSCを1回とするなどの案も議論したが、現状ではPFSの連続Runは不可能であるとの結論に至っている。

理由の一つは、PFSを取り外す際にケーブル周辺の清掃作業が必要であることである。接続部にはジェルを塗布しており、取り外すたびに完全に清掃し、再装着時に再度塗布する必要がある。2か月間装置を外したままにするとジェルが硬化するため、毎回完全な清掃

が必要となる。

この作業は望遠鏡を約 10 度まで傾けて実施する必要がある、約 5 日間の作業期間を確保しなければならない。これを毎月実施することは、装置部門としても現実的ではない。

また、SA の立場からは、クラシカル観測を含めて連続した Run が続くと休息が確保できず、運用上持続可能ではないとの意見である。

さらに、現在は 7 月および 9 月に PFS Run が設定されており、8 月には検出器交換作業が予定されている。そのため、9 月および 11 月の 2 Run で確定している。

諸隈：それでは、本件についての SAC の結論としては、先ほど共有した計算に基づき、29 夜から試験観測 4 夜を差し引いた 25 夜の半分、すなわち 12.5 夜を SSP に配分する案としたい。

(異議なし)

諸隈：SAC の結論として、SSP は 12.5 夜とする。

4. 前回議事録の承認および議事録フォーマットの確認 (諸隈)

4.1. Summary

- ・ 前回、前々回分の議事録案について最終確認を行い、正式に承認した。
- ・ 今後の議事録フォーマットは [Summary]、[Action Items]、[Details] の 3 本立てとし、[Decisions] は廃止する方針とした。
- ・ すばるウェブサイトで公開する議事録は [Summary] および [Details] とし、[Action Items] は SAC 委員内共有に留める運用とする。
- ・ 議事録案冒頭の「今回の A/I 及び議論サマリ」は 2 種類作成し、ニュースレター用と議事録用で用途別に編集する方針とした。

4.2. Details

諸隈：前々回・前回 SAC 会議分の議事録案は、各委員により確認済みであると理解している。先ほど私自身でも最終確認を行い、問題はないと判断したため、ここで最終承認としたい。

(異議なし)

諸隈：次に、今後の議事録フォーマットについて提案する。これまで数回にわたり議論し

てきたが、最終形を定めたい。構成は [Summary]、[Action Items]、[Details] の 3 本立てとする。[Details] は従来 Discussion と呼んでいた部分である。[Decisions] は廃止する。決定事項は[Summary]に記載されるため、別立てとすると内容が重複するためである。

この構成のうち、すばるのホームページで公開する議事録は [Summary] と [Details] のみとし、[Action Items] は SAC 委員内での共有に留める運用としたい。

さらに、議事録案冒頭の「今回の A/I 及び議論サマリ」について提案がある。現在は目次の直後に 1 ページ程度のまとめを記載しているが、ニュースレターに掲載するには情報量が多い部分がある。そこで同一内容を 2 種類用意し、1 つはニュースレター用として編集し、もう 1 つは議事録用として編集する形に分けたい。用途別に整理することで混乱を防ぎたい。本日よりこの方式を進めたい。

以上が議事録フォーマットに関する提案である。意見があれば願います。

(異議なし)

諸隈：それではこの方針を進める。

5. Roman-すばる 協調観測の進捗および Call for Proposals 方針 (松岡)

5.1. Summary

- Roman-すばる 協調観測について、Prioritized Themes の選定結果および今後の進め方を確認した。
- Prioritized Themes 選定結果のリリース文書は 2026 年 2 月 16 日の週を目標に公表する方針、および、リリース文書中の Call for Proposals に関する記述（応募資格、月齢条件、観測モード等）について、これまでの SAC 議論との齟齬はないことを確認した。
- Call for Proposals は 2026 年 3 月中の公表を予定しており、次回 SAC 会議開催前となるため、SAC による確認はメール審議で行う方針を確認した。重大な齟齬が判明した場合は、SAC から修正提案またはリリース延期の提案を行う可能性があることを確認した。

5.2. Details

松岡：Roman-すばる 協調観測の議論は進展している。12 月の SAC で報告したとおり、Prioritized Themes および総観測時間 100 夜の枠組が決定した。現在はその内容をリリース

する文章を準備している。今後の流れとしては、**Prioritized Themes** を公表した後、2026年3月頃に **Call for Proposals** を出し、5月から6月頃にプロポーザルを締め切る。その後審査を行い、ステアリンググループで100夜の観測計画として取りまとめ、SACに提出して審議いただく予定である。スケジュール上、大幅な遅延は難しい。

本日確認いただきたい点は2点である。1点目は、**Prioritized Themes** 選定結果のリリース文書案についてである。来週の公表を目標としているが、その中に **Call for Proposals** に関する記述が含まれているため、SACとして問題がないか確認いただきたい。2点目は、**Call for Proposals** を3月中に公表予定であるが、次回SACが3月31日であるため、会議で文面確認を行う時間がない。ステアリンググループで文案を作成後、SACへ回付し、メール審議で確認いただく形でよいか確認したい。

リリース文書では、**Prioritized Themes** 決定の報告に続き、**Call for Proposals** の予定および進め方を記載している。**Call for Proposals** はすばると Roman のコミュニティに対して、すばるの共同利用ポリシーに従い公開される。また、**US Roman Community Forum** のメンバーも応募可能であり、ホワイトペーパー著者に特別な優先権はなく、誰でも応募できることを明記している。観測モードについては、**PFS** 観測はクラシカルおよびキューの双方を考慮することを記載している。1夜あたりの時間換算（**fiber hours** 等）についても明示する予定である。暗夜は限られているため、ノミナルガイドとして **HSC** および **PFS** 観測は月齢0.5を仮定してプロポーザル準備を行うこと、より暗い条件を必要とする場合は科学的正当化を記載することを求める内容としている。プロポーザルのフォーマットとしては、**PI・Col** 情報、チーム構成、科学的説明(5ページ)、要求される空の条件、データ処理計画等を含める予定である。懸念点があれば指摘いただきたい。

諸隈：来週のリリースはどこに向けて行う想定か。

松岡：**Call for White Papers** をリリースしたのと同じ対象になるが、確認が必要である。

小山：ホワイトペーパー提出者向けの認識もあったが、公開する可能性もある。掲載場所については明確な議論は行っていない。

諸隈：リリース文書の内容について、特に応募資格や月齢条件に関して、これまでのSAC議論との齟齬はないと理解してよいか。

松岡：その認識である。月齢0.5を基本とする方針は12月SACで議論済みであり、それを明文化した形である。

諸隈：「**with reasonable separation from the target**」との記載は、観測計画策定時の配慮事項という理解でよいか。

松岡：その理解でよいが、具体的適用については整理が必要である。**Call for Proposals** にも

同様の記載を行う予定である。

諸隈：全体として書き過ぎでも書き足りないこともなく、妥当な内容と考える。

松岡：特段の懸念がなければ、この方向で最終化する。

諸隈：classical/queue 観測に言及している部分は、PFS だけではなく HSC に関することも含んでいるように見えるので、表現を適切に修正してもらう必要があるのではないかと思う。

諸隈：2 番目の記載についてであるが、HSC は Queue であると言っているのか。

松岡：HSC については何も書いていないが、たしかに PFS と同じく、classical/queue のどちらも考慮される旨を明記する必要がある。

諸隈：わざわざ PFS だけをここに記載している点である。内容としては比較的当たり前のことを書いているが、このように書かれると HSC は異なる扱いであるかのように読める。

松岡：確かに「For HSC and PFS observations」と記載するのが適切である。

諸隈：そのように記載すればよいように思う。

小山：そのように聞いている。おそらく「For the PFS observations」で始まっているのは、この段落の最後にある Fiber hours および equivalent number of the hours、いわゆる ROT についても記載するよう求めているという意味であると思う。ただし分かりにくいのは事実である。最初の文章については HSC も PFS も同じ趣旨であると理解している。

諸隈：なるほど。他に気づいた点があればお願いしたい。

諸隈：「The program may specify」の部分のみが PFS に特有という理解である。では、この点はよろしいか。これを確認した上で、3 月のいずれかの時期に Call for Proposals がリリースされることになる。その文面は本日の情報よりもさらに詳細な、いわゆる Call for Proposal としての形式を備えたものになるはずである。それを SAC 会議で議論する時間がないため、メール審議で確認するということである。

松岡：その形でよろしいか。

諸隈：期間としては 1 週間程度であるか。大まかにはその程度を想定している。

松岡：1 週間程度メールで意見を待つということか。おそらくその程度であろう。

諸隈：他に代替案はほぼない。あるとすれば Call for Proposal のリリースを遅らせるという案になる。

松岡：十分に議論すべきとの判断であれば、Call for Proposal を 4 月上旬に延期するという選択肢もある。

諸隈：ステアリンググループには松岡さん、小山さんも参加して議論しているため、メール審議で SAC の議論と大きく齟齬が生じる可能性は低いと考える。あるとしても、細部について修正提案が出る程度であろうという認識である。

松岡：そのとおりである。現時点で大きな議論になることは想定していない。

諸隈：仮に重大な問題が生じた場合は、そのままリリースすることはできないため、SACとして延期を提案することになるであろう。基本的にはメール審議で確認する方針でよいか。よろしいか。では、2点目についても了承とする。

松岡：了解した。その方針で進め、3月に Call for Proposal 文案を SAC の皆さんに回付する。

諸隈：審査の詳細等については、後日改めてタイムラインを確認しながら議論する。

松岡：SAC に提出した後の審査については、そのようにお願いしたい。

諸隈：そのとおりである。S27A から開始する予定である。

松岡：了解した。

諸隈：ダウンタイムとの関係も含めて検討する必要がある。

松岡：その点は確かに考慮が必要である。

諸隈：本件について他に意見がなければ、本議題は以上とする。

6. DPR 導入検討結果およびプロポーザル規則の運用に関する議論（武藤）

6.1. Summary

- ・ DPR（Distributed Peer Review）導入に関するアンケート結果の報告書案を共有し、海外審査員数の要件は柔軟に運用すること、DPR は現時点では導入しない方針とすることを確認した。
- ・ DPR に肯定的な意見もあり、特に若手層に一定の支持が見られるため、他望遠鏡の動向を踏まえつつ将来的に継続検討する方針を確認した。
- ・ 報告書は SAC/TAC 名義で、UM 参加者、GOPIRA、過去のすばる利用者等へ配布する予定とし、大きな問題がなければ速やかに公開作業へ移行することを確認した。
- ・ インテンシブプログラム PI が実行期間中に Gemini/Keck 経由の時間交換プロポーザルを提出・採択されている事例が共有され、専念義務の解釈および時間交換の扱いに曖昧さがあることを確認した。
- ・ 他 TAC の運用を日本側で統制することは困難であり、当面は状況監視と情報共有を継続し、同様の事例が増える場合に改めて議論するとともに、インテンシブ PI の専念義務について UM で議論する方針とした。

6.2. Details

武藤：Distributed Peer Review (DPR) に関するアンケート結果を報告書として取りまとめた。結論としては、海外審査員の数については一定の柔軟性を持たせる方針とする。また DPR については直ちに導入しないという結論である。ただし、DPR を支持する意見もあり、特に若手層に受け入れの傾向が見られる。そのため、審査形式は固定化せず、他望遠鏡の動向を踏まえつつ今後も検討を続ける。本結論としては、当面は従来の審査員形式を維持する。報告書は SAC/TAC 名義で作成し、UM 参加者、GOPIRA、過去のすばる観測者へ報告として配布する予定である。問題がなければ近日中に公開作業に移りたい。意見があればお願いしたい。

諸隈：特段の異論がなければその方針で進める。

(異議なし)

武藤：次に、重複公募に関する事例共有を行う。以前に日本枠ですばるに応募可能であった PI が、インテンシブプログラムに採択された。その後、インテンシブプログラムの期間中に、その PI は日本枠ではなくなったが、インテンシブプログラムの観測は続いている。インテンシブプログラムの期間継続中に、その PI は、Gemini/Keck から時間交換のプロポーザルを提出して採択された。

本件について、TAC 委員長としての問い合わせを受けた。小山さんに対応いただき、現行ルールが曖昧であること、日本枠内では制御可能だが Gemini/Keck TAC までは制御困難であるとの回答であった。現状はルール違反と断定できないが、不公平感を持つ声の一部あるため共有する。

諸隈：現状はルールが完全に定義されていない中で、すばる・Keck・Gemini にそれぞれ TAC が存在し、それぞれ方針が異なる。その結果、ルール違反とも違反でないとも言える状況が発生している。本日は詳細議論は行わず、情報共有とする。

宮崎：当該インテンシブはいつ終了するのか。

表：近いうちに終了する。

武藤：その通りである。

宮崎：現状の問題はそれで収束すると考えてよいか。

武藤：今回のケースは収束する見込みである。ただし将来同様事例が発生する可能性はある。

宮崎：今後は移行期を最小化する方針であるため、同様ケースは少ないと考える。

武藤：例えば日本人研究者がインテンシブ取得後に海外所属となり、Gemini/Keck 経由で時間交換に応募するケースも想定される。

宮崎：日本人は国籍に基づき応募可能であるため問題ないとの理解である。

諸隈：外国人研究者が日本所属時にインテンシブ取得後、海外へ移籍し時間交換応募する

ケースもある。その是非が議論点ではないか。

松岡：インテンシブ期間中はノーマル応募不可というルールがあるが、Gemini 経由では可能となる点をどう考えるかが本質である。

宮崎：時間交換は相互関係であり、細部まで制御するのは現実的でない。

武藤：CFP には「インテンシブ PI はノーマル PI を兼ねられない (including time-exchange programs)」と明記されている。この time-exchange の解釈が曖昧である。

宮崎：日本枠に関する規定と読むのが自然である。

小山：Gemini/Keck 側へ事情説明はしているが、向こうは eligibility よりプロポーザルの質を重視する文化であり、実質的制御は困難である。

宮崎：専念義務の趣旨は大規模プログラムへの集中である。

小山：日本の思想は時間配分の平等性にあるが、それが唯一の正解ではない。

宮崎：専念義務自体の見直しも長期的議論の対象となり得る。

諸隈：性善説に基づき運用している中で、不公平感の声が一部あるため共有したとの理解である。

宮崎：皆さんの議論に任せたい。必要な交渉はもちろん行うが、交換枠が今より増えない限りは、現状維持を希望するというのが個人的な考えである。

小山：Keck や Gemini と交渉するというよりも、インテンシブを取得した PI、特に日本の TAC でインテンシブを通した PI に対して、どこに所属してもその期間中はインテンシブ課題に専念してほしいという考えかどうかが論点である。それを制度としてコントロールできるのか、あるいは個人に専念を強く求めるだけになるのか、その整理になると思う。

宮崎：call for proposals のインテンシブの項目には専念義務がある。専念の意味は、類似のスマールプログラムを並行して出すのではなく、そのプログラムに集中して遂行してほしいという趣旨である。その趣旨をより明確に文章として記載することは可能かもしれない。そうすれば、良識ある研究者は自制するであろう。ただし、現行ルールの下では、何でも可能と解釈する者を止める術は実質的にないと思う。

小山：私も同意見である。

宮崎：今後同様の事例が増えないことを願う。このようなケースが増えた場合には改めて検討するというのでよいか。現状のケースはかなり例外的であると考えている。将来、再度同様の事象が再発した場合に改めて検討するという整理でよいか。

武藤：やや不穏な点として、この状況を発見した他の研究者から TAC 委員長である私に対し、「これは問題にならないのか。もし可能であれば自分も行いたい」という趣旨の相談があった。一定数の研究者が関心を持っている可能性がある。

宮崎：その相談者の国籍は。

武藤：日本国籍である。

宮崎：日本人であれば日本人優遇という政策的背景もある。外国人の場合とは受け止め方が異なる。

武藤：その研究者は日本人であるが、Gemini や Keck への応募ルートを自ら開拓した点を評価すべきという主張だと解釈できるか。

宮崎：そのように整理すれば、海外で活動する日本人研究者を応援するという側面もあるかもしれない。

松岡：日本人枠ですばるにアクセス可能な研究者は時間交換枠に応募しないようにという趣旨の文言が、CfP 内にあったと記憶している。

武藤：該当箇所には「インテンシブ PI はノーマル PI を兼ねることはできない (including time-exchange programs)」と明記されている。問題はこの“including time-exchange programs”が何を指すのかである。すばるを通じて提出する時間交換枠のみを指すのか、Gemini や Keck を含む全時間交換を指すのが明確でない。後者と解釈すれば、Gemini 側からすばるに来る提案もすばるのルールで制限することになるが、現状そのような運用にはなっていない。前者と解釈すれば、すばる TAC を通じた時間交換枠に限定されると理解でき、現行運用はそれに沿っている。解釈が曖昧である。

宮崎：その文書は小山さんが作成したのか。

小山：私が書いた記憶はない。かなり以前から専念義務は記載されていたはずである。

武藤：以前から存在する文言である。

宮崎：日本枠向けコールと解釈するのが自然ではないか。

武藤：すばるの CfP 自体は日本枠に限ったものではない。

宮崎：Gemini、UH、Keck はそれぞれ独自のルールブックを持っている。すばる側はそれらを直接コントロールしていない。一般的な解釈としては、日本枠に関する規定と読むのが自然ではないかと思う。

武藤：私もそのように理解していたが、文面上は曖昧である。

宮崎：明示的に表現を加えるべきか。

武藤：厳密に整理するのであれば明確化は必要である。ただし実務的な効果があるかは検討が必要である。

小山：Keck および Gemini には事情説明を行ったことがある。日本側でインテンシブを取得している PI であることも伝えている。しかし向こうはそういった規則的な部分よりもプロポーザルの質を重視する文化であり、実質的な制御は困難である。

宮崎：Keck は重複提案を問題視しない文化である。

小山：そのとおりである。良いプロポーザルは通すという発想である。

宮崎：専念義務は他プログラムを出してはならないという規定であったか。

小山：そのとおりである。

宮崎：やや厳しい規定であるとも感じる。研究者の能力は多様であり、処理能力の高い者もいる。長期的に再検討する余地はある。すぐに結論は出ない。

小山：日本の思想は一定の平等性を重視する点にあるが、それが唯一の正解ではない。

宮崎：文化的背景の問題であり、拙速に変更すべきではない。

小山：難しい議論である。

宮崎：UM で議論し、多様な意見を聞くことも一案である。

武藤：海外望遠鏡ではここまで厳しい専念義務はないという問題提起は可能である。

宮崎：専念義務自体に光を当て、見直し余地を検討することは意義がある。

諸隈：UM 世話人と相談し、適切な形で問題提起する。固有名詞は出さない形で工夫する。

宮崎：専念義務の趣旨に焦点を当てれば個人名は出ない。UM でみなさんの意見分布を確認したい。

諸隈：承知した。本件は以上とする。

7. Rubin/LSST Data Right Holder (PI/JA) 追加募集の選考結果 (大栗)

7.1. Summary

- ・ Rubin/LSST Data Right Holder (PI/JA) の追加募集 (2025 年 10 月 24 日～12 月 2 日) について審査が完了した旨の報告があった。
- ・ 応募は PI4 件 (いずれもシングル PI)、JA2 件であり、サイエンスカテゴリーは分散していた。
- ・ 書面審査 (2025 年 12 月 4 日～2026 年 1 月 8 日) および Zoom 合議により選考を行い、PI3 名、JA3 名を採択することとした。
- ・ SAC として異論はなく、応募者へ採択通知を送付する方針を確認した。
- ・ 現行 PI/JA (2024 年採択分および今回追加分) の任期は 2027 年 9 月までであり、次期選定のため 2027 年前半に公募が必要であることを共有した。
- ・ 応募者増および活動活性化のため、PI/JA 向けチュートリアルや講習会の実施等が候補として挙げられた。

7.2. Details

大栗： TENNET 等でアナウンスし、2025 年 10 月 24 日から 2025 年 12 月 2 日の期間で追加募集を行った。応募者数は PI が 4 件、JA が 2 件であった。PI の 4 件はいずれもシングル PI であり、グループ応募ではなかった。応募者のサイエンスカテゴリーは比較的分散していた。

審査委員の協力のもと書面審査を行った。2025 年 12 月 4 日から 2026 年 1 月 8 日まで応募書類を読んでいただき、点数付けとコメント記入を行っていただいた。その後、Zoom 会議で合議を行い、最終決定を行った。

選考方法であるが、まず書類審査において科学的価値、研究計画の明瞭性、日本コミュニティへの貢献などについて絶対評価で点数を付け、コメントを書いていた。1 つのプロポーザルに対して複数の審査員が評価を行い、その点数とコメントをもとに合議して決定した。評価の低い PI 応募については JA を割り当てるという対応も行った。その結果、PI での採択 3 名、JA での採択 3 名となった。本結果に問題がなければ応募者に通知したいと考えている。

今後についても確認する。今回の募集は追加募集であり、2024 年に採択した分の追加である。その時の方々の任期終了までを対象として実施したものである。現行の PI および JA の任期は 2027 年 9 月までである。そのため、次期の PI・JA を選出するためには、2027 年前半から再度公募を行う必要がある。

SAC も切り替わっているため、次期 SAC メンバーに引き継ぐことになると思う。公募方法については今後検討が必要である。申し送り事項として、あまり複雑な制度にしないしてほしいという意見が出た。PI に対して 3 名の JA をアサインできる形にしているため、その点はなるべく統一してほしいということである。

また、応募がもう少し多い方が望ましいとの意見があり、活性化策について Zoom 会議で議論した。具体的には、チュートリアルや講習会の実施、学会や研究会での発表などが考えられる。

現状としては、サーベイはまだ本格的に開始していない。現在 LSST カメラで本格サーベイに向けた最終準備を行っており、各種チューニングを進めている。シーイングもかなり改善してきており、準備が整いつつある。ただし本格開始はおそらく 4 月頃になる見込みである。それ以降、本格的に結果が出始める状況になると考えている。以上である。

武藤：確認したい。実際に観測が開始されるのはいつからか。オープンユースがどの時点から入るのか気になっている。

大栗：現在フルのカメラが稼働しており、サーベイ開始に向けた最終準備を行っている。しばらくその作業を続け、3月頃に一度メンテナンスを行う予定と聞いている(注:3月のメンテナンスはその後延期となった)。順調に進めば、その後に本格的なサーベイが開始される見込みであり、今年の4月頃になると考えられる。

武藤：理解した。こちらへの影響も大きそうだ。

宮崎：時間交換は既に始まっているのではないか。

小山：始まっている。Rubinについては時間交換という表現が適切ではないかもしれないが、Rubin側からのプログラムの受け入れが始まっている。

宮崎：提供が始まって、SCEXAOがすべてであったか。

小山：前はそうようになった。今後はRubinのフォローアップなどが出てくるであろう。

武藤：それを踏まえて、特にPFSへの影響を懸念している。先にそちらで時間が確保された場合、オープンユースがどの程度残るのか気にしている。

小山：その点は今後継続的に問題になると考えている。

武藤：夜数はどうなるのか。採択はよいとして、夜数配分が気になる。

小山：Rubin側から来る時間は、セメスターあたり2.5夜である。

武藤：了解した。

諸隈：他にあるか。今のスライドのチュートリアルや講習会は良い提案と思うが、PIとJAのみがデータにアクセスできるのか。publicリリース後を想定しているのか。

大栗：現時点で想定しているのはPIおよびJA向けである。PIの中にも、具体的にどのようにデータを扱えばよいのか見えづらいという声がある。採択はされたが、実際にどこから手を付けてよいのか分からない研究者もいる。そのため、まずはPI・JA向けに実施することを想定している。

諸隈：理解した。では、採択通知を出していただくということで進めてほしい。

8. Subaru Users Meeting 2026 (UM 2026) 開催日程および準備状況 (諸隈)

8.1. Summary

- Subaru Users Meeting (UM) 2026 の開催日程について検討し、従来候補としていた7月上旬の3週間は、他研究会との重複や三鷹大セミナー室の利用不可等により開催が困難な状況であることを共有した。現時点の第1候補としてJST 6月17日(水)～19日(金)を想定し、関係者との調整を進める方針とした。

- ・ 三鷹大セミナー室については、総研大講義および談話会等の既存予定との調整が必要であり、関係部署と交渉を行うこととした。
- ・ S26B 採択通知が 6 月中旬見込みであるため、UM での TAC 報告は S26A 中心となり、S26B は簡易報告に留まる可能性を共有した。
- ・ UM 世話人については、諸隈が今週中に候補者へ依頼を行い、観測所側の担当者については別途調整することとした。

8.2. Details

諸隈：UM 2026 の開催日程を確定したい。これまでコミュニティへのアンケート結果を踏まえ、7 月上旬の 3 週間を候補としていた。しかし、系外惑星研究会、SPIE、AGN 国内研究会との重複に加え、三鷹大セミナー室の利用不可日が重なり、当初候補は開催が難しい状況となった。そのため前後の期間も含めて再検討した。アンケートでは 6 月下旬も比較的参加困難者が少なかったが、TAC 報告のタイミングを考慮して 7 月上旬を優先していた経緯がある。SAC 委員へのアンケートの結果、現時点では JST 6 月 17 日（水）～19 日（金）が最も適当な候補と考えている。参加について大きな支障はないか。

宮崎：日程自体は問題ない。ただし開催間隔が短くなるため、報告内容は簡潔でよいと考える。

小山：大セミナー室には総研大講義や科学研究部談話会が既に入っている。どの日程を選んでも何らかの既存予定と重なるため、関係者との調整が必要である。18 日は終日利用可能であるが、17 日と 19 日は調整が必要である。

諸隈：第 1 候補として 6 月 17 日～19 日で交渉を進めたい。可能であればこの日程を優先する。

武藤：TAC 関連として、S26B 採択通知は 6 月中旬（6 月 15 日前後）を想定している。この日程の場合、S26B の詳細報告は難しく、応募数や採択数の簡易報告に留まる可能性がある。

諸隈：報告可能な範囲で対応すればよいと考える。

小山：日程が調整不可の場合は速やかに連絡する。必要に応じて部屋変更も検討可能と考える。

富永：科学研究部側の行事については、部屋変更の可能性を事務を確認する。

諸隈：可能な限り第 1 候補で実施する方向で調整をお願いする。

諸隈：次に UM 世話人についてである。人選が確定していないが、今週中に候補者へ依頼メールを送付する予定である。観測所側の担当者については別途協議する。

宮崎：観測所側の人選については小山さんとオフラインで相談する。

諸隈：本件について他に意見がなければ、本議題は以上とする。

9. その他報告（諸隈）

9.1. Summary

- ・ SCExAO の Facility Instrument 化に関するコミュニティ向けアンケートについて、田村直之さんの意見を聴取した上で SAC に報告する。
 - ・ 天文学会中の光赤天連総会に諸隈委員長がオンラインで参加し報告を行う予定である。
 - ・ Subaru3 研究会（3月11～12）について、参加申込およびプログラム概要を含むセカンド・サーキュラーを来週初めに配信予定である。
 - ・ 4月以降の SAC 会議日程について、近日中に日程調整を行う。
 - ・ 宮崎所長が ABC 生駒センター長と SCExAO について協議し、ABC として SCExAO を今後も重要な基幹装置と位置付け、Facility Instrument 化の可能性を含め共同で検討していくことで合意した旨の報告があった。
-

9.2. Details

諸隈：SCExAO の Facility Instrument 化に関して、前回 SAC でコミュニティ向けアンケートを実施する方針とし、対象コミュニティおよび設問内容を検討することとした。その後、小山さんと議論を進めているが、田村直之さんの意見を改めて伺いたいと考えている。今週後半に面談の機会があるため、その内容を踏まえて改めて SAC に報告する予定である。次に、光赤天連総会について共有する。3月5日、天文学会2日目の昼休みに開催予定である。現地参加は難しいが、オンラインで参加し報告を行う予定である。資料は事前に共有する。

Subaru3 研究会は3月11日から12日に開催予定である。ファースト・サーキュラーは TENNET および GOPIRA へ配信済みである。参加申込方法およびプログラム概要を含むセカンド・サーキュラーを来週初めに配信する予定である。

また、4月以降の SAC 会議日程について近日中に日程調査を実施する予定である。協力をお願いする。

宮崎：追加報告として、ABC 生駒センター長と SCExAO について協議した。ABC として SCExAO は今後も重要な基幹装置であり、持続的に活用したいとの認識を共有した。Facility Instrument 化の可否は未決定であるが、仮にその方向で検討する場合の体制や解決策につ

いて、ABCと共同で検討を進めることで合意した。

次回 SAC 開催日時：

2026 年 3 月 31 日（火）9 時 30 分～